



竿だけは
選んだほうが
いいかな。

軟らかい竿で
あまりジグが
飛ばない
ようにする。

◀竿先を海面に向けてゆっくり小さくシャクるのがコツ

▲軟らかい専用ロッドはタチウオの引きに追従するように曲がり込むので釣り味も格別だ

状態は実によく工夫されており、水の抵抗で様ざまなアクションをするように作られている。おおよそ金属とは思えないほどヒラヒラと舞ったり、シュツ、シュツと横つ飛びしたりと、その動きはかなりダイナミックだ。これらのアクションは一般的に魚に対するアピール力が高いけれど、タチウオに関してはネガティブに働くこともある。「タチウオは泳ぎも捕食もヘタな魚だからね」とヨッシー。「ジグがハデに動きすぎると、追いつけないんだよ(笑)。しかもなりふり構わず食いつこうとするわ、泳ぎがヘタだわで、ミスバイト連発(笑)。」ジグではなくリーダーやPEに噛みついて、ラインを切っちゃうことも多々あるんだ。そんなタチウオのキャラクターに合わせるなら、軟らかい竿でシズシズとシャクる、もしくはシャクラずにタダ巻きに徹するのがよい、ということになる。逆に言えば、必死にシャクラずとも釣れるわけだから、ピギナーにはもってこいなのだ。8時40分、猿島沖の水深60メートル前後に集結したタチウオ船団の中で釣りが開始されると、早々にヨッシーが1本目を釣った。電光石火である。

モーニングサービスとばかりに船全体でバツタバツタとタチウオが釣れ盛る。サイズは指3〜4本前後が中心でドラゴン級ではないもののドスンという重おもしろい引きが竿をしならせ、釣り人たちを楽しませている。中学1年生の内藤瑞希くんは、お母さんの江里子さんとの釣行だ。エビエサのマグチ釣りやアジ釣りを経験しているが、タチウオジギングは初めて。「いつもお母さんだけズルイ」と、今回の初挑戦となった……などとじつじつと紹介する間もなく、「瑞希が掛けました!」と母・江里子さんが声をあげた。「おおっ、やったね少年!」

空振りしたって恥ずかしくない
疑わしきはすべて合わせる

ヨッシーはバツタバツタとタチウオを釣りまくっている。彼の釣りを観察してすぐ気付くのはアタリ感知率が非常に高いことだ。竿先が動いたか動かないかシロウト目にはよく分からないがモヤモヤした違和感にもピンツツと合わせを入れ、フッキングに持ち込む。敏感な専用ロッドを使っていることを差し引いても、アタリ、もしくはアタリの雰囲気を感じ

今回は竿とペンの代わりにカメラを持ったライターのタカハシゴウが迫る。瑞希くん、割と早いタイミングで人生初タチウオをあつさり釣ってしまった。これぞナイスガイ・タチウオ。釣られるべき人をしつかり選んでいる、としか思えない。「けっこう引いた……」瑞希くんは、タチウオの力強さに驚いた様子だった。「やったじゃん!」ヨッシーもうれしそうだ。ルアー船がとて気持ちはいいのはだれかが釣るとだれもが喜ぶことだ。もうすぐ13歳になる瑞希くんが、暑い船に涼風を運んでくれた。

するセンサーは極めて鋭敏で、かつ、迷うことなく鋭い合わせを入れる。「……ん?」と思ったら即合わせを入れるのはどの釣りでも共通しているかもね」と、ヨッシー。永遠の初心者・タカハシゴウは「それができたら上級者だよ」と苦笑いする。「オレだって、「……ん?」と感ぜるときはある。よくある。でも「アタリかな、違うかな」

吉岡進の釣りを楽しく感じるままに

E2F

Enjoy Every Fishing no.17

東京湾の ルアータチウオ

撮影・文◎高橋剛

★人気の釣り物、東京湾タチウオジギング。夏休み中ということもあり、東京湾奥深川吉野屋のルアータチウオ船は大盛況だ。お気軽でありながら、釣り味、食味とも最高のタチウオ。いつも以上にフレッシュな雰囲気の中、お客さんとふれあいながら夏タチを満喫するヨッシーだった。

夏休みはいいものだ。今や危険レベルに暑くなってしまうので、脳天気「外に出る」とは言いにくい。しかし、街に野に山に、そして海に、学校から解放された少年少女青年たちがわらわらと姿を見せるのは、それだけで素晴らしい。書を捨てて船に乗り、竿を握った彼ら・彼女らは、生き生きとした目をしている。いつもはベテランたちがシブくて重厚な雰囲気を出している釣り船も軽やかに華やぐ。7月25日、東京湾奥深川吉野屋のルアータチウオ船は、まさにそんな空気に包まれていた。まだ涼しい早朝5時、一番乗りで船に乗り込んだのはE2F取材班だ。のんびりと準備をしながら、ふと気付くと左舷、右舷とも10人の大賑わいである。「やるな、タチウオ……」ヨッシーがつぶやく。タチウオジギングは東京湾でも人気の釣り物だ。人気の理由はいくつもある。まずジギング自体、仕掛けが極めてシンプルである。極論を言えば糸の先にメタルジグが付いているだけなのだ。ラインの太さ、リーダーの太さや長さ、バイトリダーの太


さや長さなど、こだわればいくらでもこだわれる。だが基本的には糸の先にジグが1個ぶら下がっているだけ。とことん簡単お手軽である。そして引きが強い。あの細身のどこにトルクが潜んでいるのか分からないが、ドスンと重みが乗りジーとドラグを引き出すさまはなかなか豪快だ。さらに食べてうまい。タチウオは顔つきこそいかつい、繊細な白身が多彩でおいしい料理に変身する。あまり流通しないだけにいったんあのおいしさを知ったら、いそいそと釣りに行くしかないのだ。最後にココが非常に重要なのだが、比較的よく釣れる高打率

飛ぶばない? 飛ばない? 飛ぶばない? 飛ぶばない?

だから軟らかい竿であまりジグが飛ばないようにする。そのほうが確率は上がるよ」

「ジグが飛ばず、飛ばない」とは、タチウオジギングにおいて多用されるセリフである。ジグが空を飛ばすわけではない。竿をシャクったときに海中でジグが横つ飛びするかしらないか、ということだ。ジグは金属のカタマリだが形

な魚なのだ。ナメていると痛い目に遭うのはどの釣りでも同じだ。しかしタチウオはだれもにチャンスをつけてくれる優しいヤツなのである。怖いツラ構えなのに味わい深いナイスガイ。こういう人は信頼できる。タチウオは魚だ。



▲出船前に日焼け対策をしておこう



こっちも
初タチ

▲初挑戦の内藤大智さんは初物を持ってヨッシーと記念撮影



▲タチウオジギングの話で盛り上がる

▶ルアータチウオ経験者の池田夏樹さんは1メートル級をキャッチ



▲ヨッシーがジグにサインをしてプレゼント



●深川吉野屋名物、「潮位が高いときの出船は、運河の橋の下スレスレを通過する」。思わず首をすくめてしまうが、見事な操船は見応えあり。あまりにスレスレゆえ、操船室は下部へと収納され、竿とヨッシーは寝かせておかないと折れてしまう。いやヨッシーは寝なくても。

出す二人の姿はとも美しく、「こういう若者がいるうちは、ニッポンの未来は安泰だな……」とさえ思える。

メインで使うジグは、ジャックカル・アンチヨビメタルだ。笑いながら、「もちろんヨッシーさんに付度します！」

最近の東京湾タチウオジギングは、同じ重さでもひとときわコングは、同じ重さでもひとときわコングが大流行している。今回も船中のお客様の多くがタングステンジグを使っていた。

そんな中、鉛製のアンチヨビメタルを使う二人なのだ。

「タングステンは値段高いんですよ……。切られるのが怖いから、ちよつと使いづらいんですけど頭をかく内藤さんである。学生らしいではないか。そして、鉛製ジグをメインにしながらも内藤さん15本、そして池田

さんが20本と、しっかりと釣果を出して見せた。

ちなみにヨッシーの今回のメインジグはフォールスピードの速さが特長のタングステン製TGバンブルズジグバンブだ。これで30本を釣った。

確かに今の東京湾タチウオジギングはタングステン製ジグが有利なケースが多い。しかし、タングステンでなければ釣れないわけじゃない。リーズナブルな鉛製でもちゃんと釣れる。このあたりもタチウオはナイスガイなのである。

午後2時に沖揚がりとなった。親子組はタチウオジギングが初めての中1の瑞希くんが6本、経験者の母・江里子さんが12本。そして大学生組では、初めての内藤さんが15本、経験者の池田さんは20本だった。

落とすとして巻くことさえできれば、だれでも釣れるチャンスがある。でも、しっかりとキャリアの差が出る。ここがタチウオジギングの面白さであり、奥深さだ。

「タチウオは自分で食べたくて釣ってます。ママ友に配ると喜ばれるんですよ」と、江里子さん。「腕が痛い……」と言いつつ、瑞希くんも笑顔だった。こうして充実の痛みは心に刻み込まれるだろう。

そして大学生二人は船宿で荷物をまとめ、ヨッシーとのふれあいタイムをひとしきり楽しむと、ガラガラと荷物を引きながら駅に向かった。

皆さんの姿に、満足げなヨッシー。実はこの日船中最大の、指幅5本半級を釣っていた。

陽光が傾き、少しだけ暑気が弱まった午後。それぞれにとっての、よき夏の日だった。



きたら

▲何本か釣るとタチウオの引き味を楽しむ余裕も出てきた



祝！
初タチウオ

▲お母さんの内藤江里子さん（右）に釣り方を教わり人生初のタチウオをキャッチした瑞希くん。やったね、おめでとう！



▲こまめな水分補給を忘れずに

「今日日はパターンがないね」とヨッシーは言った。「フォールでも食ってくると、食い上げもあつた。ジグの色や重さも色いろ替えてみたけど、これというパターンは見つけれなかったな……」

パターンがないのも、パターンのひとつと言えるよね。こう

ファミリーや仲間たちと楽しむこれぞ正しい夏休みの過ごし方

19歳の池田夏樹さんと20歳の内藤大智さんは、同じ大学の1年生。二人とも釣り部員だ。

池田さんは去年の「バリバスカップ・東京湾太刀魚釣り大会」で138・8センチのドラゴン釣って優勝した。今回と同じ、深川吉野屋での快挙だった。

「今、メインで狙ってるのは外房のヒラマサの大物なんですけどね」と池田さん。

「でも、タチウオはタチウオでなかなかセレクトタイプ（ジグを選ば）なところが面白いんです」と、同級生の内藤さんと連れだ

つての釣行である。

内藤さんは初めてのタチウオ釣りだ。1本を釣りタカハシゴがカメラを構えるが、タチウオの持ち方がおぼつかない。

「そうじゃないよ」と魚の持ち方を指導する池田さん。「もうちょい上かな」「横にしたほうがいいんじゃない？」とキャリアの差を見せる。

それにしても「真夏のある日、学友同士が船に乗り、タチウオを狙う」のである。なんとすがすがしい青春の1コマだろう。

夏空のもと、肩を並べて竿を

と考えちゃうんだよね。

で、「絶対確実100パーセントアタリでございます」と確信が持てたときだけ合わせる。空振りってなんか気恥かしいからさ」「それが問題なんだよ」とヨッシー。空振りしたって恥ずかしいくないよ。そもそも、だれもゴーさんを見てないから。違和感があつたら即合わせる！

さつきは捕食ベタ、泳ぎベタと言ったけど、ジグの近くで様子を見たら、軽く噛んだりすることも多いんだ。そういうときはドスンという明確なアタリはなく、違和感程度。「モフモフしたアタリ」ってヤツだね。

そこで合わせができるようになるよ」と、釣果ものばせるよ」

パターンをつかむことも重要だ。ベイトや潮の具合から、タチウオのヒットパターンは刻々と変化する。ジグのアクションは動かしすぎないことが基本だ

が、動かしたほうがいいこともある。また潮加減や潮色により、ジグの色を選ぶこともある。

そうかと思えば……。

「今日はパターンがないね」とヨッシーは言った。「フォールでも食ってくると、食い上げもあつた。ジグの色や重さも色いろ替えてみたけど、これというパターンは見つけれなかったな……」

パターンがないのも、パターンのひとつと言えるよね。こう

ファミリーや仲間たちと楽しむこれぞ正しい夏休みの過ごし方

いうときは、とにかく色いろ試すしかない。だからジグも色々なカラー、色んな重さを用意しておくといいよ」

内藤さんは初めてのタチウオ釣りだ。1本を釣りタカハシゴがカメラを構えるが、タチウオの持ち方がおぼつかない。

「そうじゃないよ」と魚の持ち方を指導する池田さん。「もうちょい上かな」「横にしたほうがいいんじゃない？」とキャリアの差を見せる。

それにしても「真夏のある日、学友同士が船に乗り、タチウオを狙う」のである。なんとすがすがしい青春の1コマだろう。

夏空のもと、肩を並べて竿を



▲ヒットルアーはタングステン製のTGバンブルズジグバンブ120グラム